

博 士 学 位 論 文 要 旨

清末における日本留学の中国人女性像

—奉天省が派遣した女子留学生を中心に—

平成 29 年 3 月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

馬 小力

本論文は、近代中日両国の留学関係史料に基づいて、一九〇七年に奉天省が日本の実践女学校に官費派遣した女子留学生を対象とし、彼女たちが留学に派遣された背景、留学中の実態及び帰国後の活躍を中心に、女性の日本留学史における史実の考察・諸課題の解明を行い、清末における日本留学の中国人女性像の多様な性質を明らかにするものである。

清末の中国人日本留学生に関する研究は、一九二〇年代から始まり、留学史の総括的研究、或は近代中日交流史に名が残っている留学生の個別研究、或は革命運動との関連などの視角で、数多くの研究成果が挙げてきている。そのなかで、清末の女性の日本留学史についての研究は、周一川の『中国人女性の日本留学史研究』（国書刊行会、二〇〇〇）は代表的なものとして挙げられ、広範な史料を引用し、その後の研究に大きな示唆を与えた。しかし、従来の研究では、一九〇七年に奉天省が派遣した官費女学生の日本留学は十分注目されず、それに関する基本的な史実さえも不明な状態にとどまっている。清末に生まれ育った女性である彼女たちにとって、日本留学はどのようなものであり、日本で何を経験したか、さらに彼女たちの人生や生きていた社会にどんな影響をもたらしてきたかなどという問題意識に立脚し、『官報』や『日本婦人』などの史料を利用して史的考察を行った上、明治日本の新聞記事や小説を通して、清末に日本留学の中国人女性の実像を検討しようということは本論文の目的である。

本論文は序論、終論を含めて、七つの部分からなっている。まず第一章では、清末における女子教育の概況から、明治日本による女子教育と留学生の受け入れに対する積極的な姿勢及びその理由、さらに奉天地区の女子教育事情と関連しながら女子留学派遣の経緯をたどった上で、奉天省の官費女子留学派遣の歴史的背景を把握してみた。もともと清朝の発祥地であった奉天省は、近代の侵略戦争のため、教育が全体的に遅れていた。ようやく清政府の「新政改革」を背景に、日露戦争後、奉天省は独立の教育行政機関としての学務処を設置し、新式学堂を開設し、地域教育を振興しようとしていた。そのため、女子教育を含め教育全般を推進するなか、師範人材の育成を目指して、女子師範学堂の女学生を官費で派遣する政策を実施した。これは清末において、日本の女子教育を学ぼうという清末革新派官僚や有識者たちの提唱と深く関わっていたものである一方、日本明治政府や女学校が女子留学生に対する積極的な受け入れ態度と呼応し、諸方面の要素が総合的に働いた結果でもあると思う。

続く第二章では、一九〇七年に奉天省が実践女学校に派遣した女子留学生の人数と名簿をめぐって、改めて史料を発掘して再検証を行った。まず派遣人数について、複数の史料に基づいた先行研究では、実藤恵秀と周一川によってそれぞれ代表する「二一名」と「二三名」という二説が出されているが、実践女学校の『実践女子学園一〇〇年史』を確認し、ほか三つの史料（『日本婦人』、『順天時報』と『東京朝日新聞』）に基づいた再検証の結果、一九〇七年五月に二三名の奉天省の官費女学生を受け入れたのは史実であることが判明し

た。さらに、中国人日本留学史関係の一次史料として、『東三省政略』、『女子世界』と『官報』を用いて、二三名の女子留学生の名簿について、総合分析を通して明らかにした。その過程においては、奉天省の新式教育の理念下に積極的に女子教育を進める政策がうかがえると同時に、清末の女性が男性と平等に教育を受けようとする近代中国人の意識が現れてきたことがわかった。

第三章、奉天が派遣した女子留学生の留学実態をめぐる考察では、これまで女子留学の研究に利用されていない、清政府の遊学生監督処の月刊誌『官報』と、帝国婦人協会の機関誌『日本婦人』という二つの史料に基づいて、留学中の監督管理、寄宿舎の生活や健康状態、学習状況、課外活動の参加および卒業や帰国後の活躍も含んだ歴史的考察を行った。彼女たちは年に四五〇円ほどの官費や医療費補助などの政策に恵まれていたが、頻繁に病院へ行って診察を受けたり、入院して治療を受けたりして、健康状態のため中途退学や卒業できない者もいた。全体的にみれば、清政府の遊学生監督処と、実践女学校の清国留学生部による二重監督体制下で、留学の修業年数、課程設置、受講時間、寄宿舎生活などの面においては多に保障され、それ以前の女子留学と比べて、留学教育の本格化に特徴づけられていた。そのため、これらの女子留学生は、多方面にわたる講義科目で新しい知識を豊かにしていく知育のみならず、体育運動、多彩な課外活動などにも参加することで、清末の女性として心身を束縛されていた状態から解放されていたとうかがえる。また、これまでの研究に引用されている、実践女学校の留学生の卒業日に関する矛盾した記録について、新たな史料で再検証ができ、彼女たちの卒業日を是正した。同時に、これらの女子留学生が卒業後、またほかの女子専門学校に入学したり、帰国して奉天省を中心に中国東北地方の女子教育事業に従事したりする例が多数であったことを解明し、清末女子教育の発展を大いに進めたことを、今回の考察を通して明らかにした。

第四章では、奉天省の二三名の女子留学生のなかから、百年の人生を過ごした崔可言（一八九二～一九九二）という一人の女性をクローズアップして、彼女の日本留学体験と、帰国後の軌跡をめぐる生涯を取り上げた。二〇一四年の七月から、崔可言の遺族である、次女盧鶴柏と六男盧鶴維への電話、五男盧鶴紋の自宅訪問によるインタビューの結果をまとめて、日本留学前後の生活実態に関する情報を収集した。開明的な思想を持つ家に育ち、キリスト教の信徒である父の勧めで官費留学生という身分で日本へ赴き、帰国後、夫とアメリカで二年間の生活を経て奉天省にて家庭を持ち、天津へ転居した後も東北大軍閥の張作霖の一家と親しい関係を持っていた、という実践女学校に在学した、秋瑾の後輩である女性の生涯を明らかにした。彼女は、日本留学中に優れた勉学力と適応能力を発揮して、学業に専念していた。三年間の師範科の勉強を終え、卒業後直ちに帰国して、瀋陽市大南関女子小学校で教鞭をとった。結婚後、間もなく教職をやめたが、のちに張作霖の夫人と娘たちの家庭教師を務めていた。一九三一年柳条湖事件の直後、崔可言の一家は天津へ避

難し、その後も張作霖の夫人たちと旧交を温め続けた。崔可言は「良妻賢母」養成の留学教育を受けたが、西洋留学の経験を持った知識人の夫とともに、子供を熱心に指導し、三人の娘も含めて全員大学に行かせた。九人の子供には、世界的に有名な原子エネルギー科学者（長男）もいれば、航空設計専門家（次男）や外交官（六男）、大学教師（長女、五男）などもいる。従来の留学生史研究における日本留学の清末女性像は、秋瑾のような女性革命家を中心に形成されてきたが、今回崔可言という個人例の研究を通して、現実には異なる留学目的や留学の実態を持っている女性もいたことがわかった。これをもって、今後の女子留学史の研究、中日交流史の研究に新たな一視点を提供しようというのが本研究の狙いである。

以上奉天省の官費女子留学生を中心に、日本留学前後の史的考察の上、さらに第五章では、彼女たちを清末の日本留学の女性全体に組み込み、日本のメディアや文学作品に映された中国人女子留学生の群像を検討してみた。明治期の新聞記事（主に『東京朝日新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』）に報道されている「清国女学生」を調べた結果、出身は中国南方のほうが多く、年齢はそれぞれであり、母子や親族関係のある女性も同じ学校に在学している事実が確認できた。また、奉天省の官費女子留学生の大多数のごとく、学習や研究に熱心な女学生のほか、秋瑾のように女性解放運動や愛国運動に身を投じた女学生も少なくなかったという。一方、日本の女性作家宮本百合子の戦後の小説、『二つの庭』（一九四七年）からも、清末に生まれそだった中国人女性の多様性がうかがえる。纏足をして日本留学を体験した女学生や、主人公がアメリカ留学中に会った中国人女子留学生のほか、女子教育権への弾圧に対する強い反論をした日本見学団の女学生も登場しており、これらの留学や外国訪問などの形で近代教育を受け、西洋の女子解放思想に影響された中国人女学生の描写や記述が、近代中国人女性の生き方・あり方を示唆している。

最後に、終章で本論文の結論として、清末女性の日本留学の多様性及びその原因をまとめている。清末に日本留学を経験した女性像の多様性というのは、最初の清末女子留学生金雅妹といい、周一川の研究でいわゆる「随伴留学生」といい、さらに学生運動や革命運動に活躍していた愛国女学生から、および奉天省の学業に専念し、帰国後女子教育のために活躍した官費女学生に至るまで、さまざまな女子日本留学のパターンに現れているものである。また、多様性が形成する直接的要因としては、女子留学生の個人的な身の回りの環境によるものである。その根底には、歴史的・時代的理由のみならず、世界的国際関係、西欧思想の影響、そして中国革命運動などが総合的に働いた結果であり、客観的な産物でもあったことを指摘することができる。いずれにせよ、清末女性の日本留学は実際に、近代中国女子教育の発展、女性解放運動さらに近代革命運動にも積極的な役割を果たしたと評価できる。

要するに、本論文は、清末における多様な日本留学を経験した女性についての研究を通

して、日本留学していた女性が、近代中国女性史における画期的な一頁を切り開いたことに証拠を提供している。女性は排斥するものではない、排斥されるものでもない。どんな世界情勢でも、そんな政治環境でも、女性が男性と肩を並べて人類の歴史を描いているものである。清末に日本留学の女性は単に中国人留学生史の一般的な登場人物のみではなく、近代中国女性史、同時に中国近代史、中日女性交流史上に先駆的なヒロインという役をつとめていたため、女性学の視点から、今後の課題としてさらに清末女性の研究を深めたいと思う。